S52

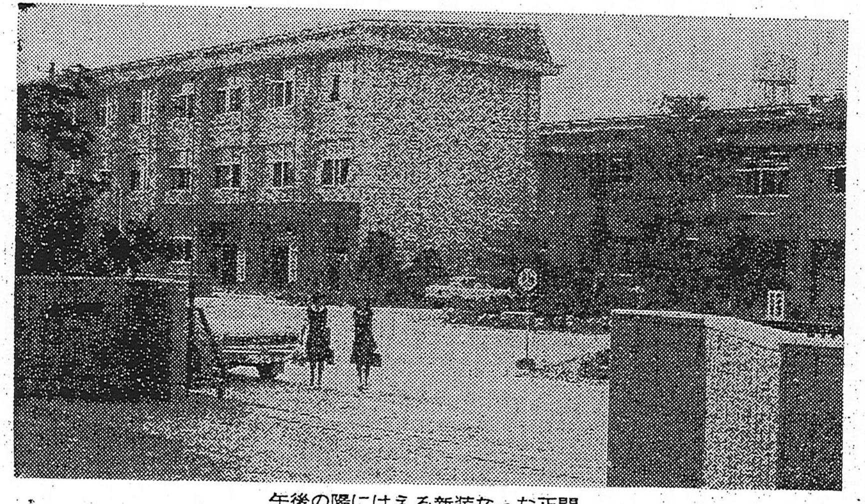
1977
11月19日(土)
創刊号

ちくま

発行所
東京都文京区小石川5－2－1（三新建設内）
長野県上田千曲高等学校
同窓会関東支部　編集部
発行人　神林徳治
編集部長　小林　侑
編集責任者　内藤利幸
電話　811－7654

関東支部会報ここに創刊

新しいひかり生る


午後の陽にはえる新装なった正門

発刊の辞

関東支部長　神林徳治（建20）

かねてから我が同窓会にも機関紙をと念願して来たが計らずも編集委員諸君、又其の他の役員諸君の努力によってこの〃ちくま〃を発刊出来た意義は誠に大きい。長野県には公立、私立を含めて百を越える高等学校がある。又百に近い同窓会がこの東京、関東地区に支部組織を持っている。その中でこうした機関紙を持っている同窓会は、まだまだ少ない、しかし無い訳ではない。先陣として範とするに足るものもいくつかはある。

そうした同窓会の仲間入りが初代の関東支部長である私の時に出来たという事は私個人にとって無上の喜びとするところである。

とまれ!、個人の喜び等些細なものである。会員の皆さんの喜びや如何にと云いたい。そしてこの発刊のために骨身惜まず働いてくれた編集委員諸君の労も大変であったし、又、内外から我々の為に応援して下さった皆様にも又ここで深く感謝の言葉を捧げたい。

我が千曲高等学校は二つの根っこを持つ学校である。戦後学制改革等により出来た、上田市立高等学校（旧上田商工学校）と上田市立高等女学校（旧実科女学校）が合併、県立移管となり茲に上田千曲高等学校が誕生した訳である。

この間に戦争があり、学制改革があり合併があり校舎の移転があり、又今校舎の改築が進められているといった非常に変化の激しい中を発展して来た学校である。従って会員諸君のバイタリティも非常に大きい。心強い限りである。

反面、各々専門教科があり個性もそれぞれ異っている。だからこそ会員の皆さんの心の糧となりその心を結び合せる何かが必要だと常に考へていた次第である。その機関紙が茲に産ぶ声を上げたのである。信州の山々は今紅葉の時であり、水澄む季節である。美しい信州に故郷を持つ美しい心の皆さんがこの産ぶ声を上げた機関紙〃ちくま〃にどうか声援を送って欲しい。そしてその生長に参加して欲しい。同窓会は皆さんのためにあるのであって、リンカーンと同じ気持で私も今迄努力して来たし、今後も努力する心算である。

幸い各部会共に各役員の方々の御奔走が実を結んで一年一年、生長を続けている事は御同慶の至りである。本年も機械部会、および建築部会が盛大に開かれ、私もお招きに預り出席させて戴いて多大の感銘を受けた。十一月十九日には各部の連合の総会が開かれる。

一人でも多く参加され、有意義に一日を過される事を主催者の一人として期待するものである。

会報発刊に寄せて

長野県上田千曲高等学校同窓会々長　滝崎　隆

昭和25年当時の正門

同窓会関東支部の皆さんが、英知を集められ、会報が発行される運びとなったことは、そのご努力と積み上げの成果に心から賛辞を贈るとともに、深甚なる敬意を表します。

上田商工学校、上田市立高等女学校が合併して市立高等学校となり、昭和二十四年から県立上田千曲高等学校と名称をかえてきた我が母校の変遷は、さまざまな苦労と喜びを内在していますが、これまでの過程は、どちらかというとすべて地域社会との強い結びつきのなかで、美しく〃昇華〃されて来たように思えます。

美しい山並みに囲まれた上田盆地の一角、太郎山に抱かれるように広がっている上田の街並み。…東に遠く浅間山。烏帽子岳を望み塩田平のかなたに険しい独鈷山や雄大な美ヶ原を見渡し、千曲川の豊かな清流のせせらぎを聞き、勉学にいそしんだ同窓生の仲間達は今では一万数千名を数え、全国津々浦々に、それぞれの分野で活躍されていることを思うと、限りない喜びが湧いてきます。

ノスタルジア信州。故郷は遠くにありて想うもの……。とでも申しましょうか、数十余年も前に卒業された皆さんが静かに瞼をとじたとき、脳裏に浮んでくる学舎のイメージは、おそらく広漠たる砂地に、飛行学校時代の格納庫や、兵舎を改造した教室。点在していた貧しい施設。等々ではないでしょうか？

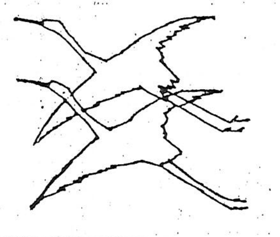
現在建設中途ではありますが、実業高校として県下に誇る立派な校舎のなかで、在校生諸君が勉学にスポーツにと、心身の鍛錬に元気に力強く励んでいる姿を想像することはできないでしょう。

社会が日に新たに変貌するごとく、我が母校もまた大きな歩みをしつづけています。過去は忘却の彼方へ消えていきますが、その営みの歴史はいつまでも長く続いていかねばなりません。

この会報も今後長く続くためにはかなりの努力を必要とすることでしょう。どんな熱心な賢い人でも少人数の力では限度があります会員皆が力と知恵を出し合い、組織の上で結束していっていただくようお願いします。

先輩と後輩。一本の絆がこの会報によって力強く結ばれ、信頼の場として活用され、関東支部がより良い発展につながるよう念ずる次第です。

最後に、皆様方の今後のご繁栄を心からご祈念申しあげまして、ごあいさつといたします。



〃ちくま〃の発刊を祝う

長野県上田千曲高等学校長　塩原　松美

本校同窓会の関東支部は最近会員数も増加して大世帯となり、その活動も活発なものがありますが今般関東支部会報の発刊が計画され実現の運びに至りましたこと誠にご同慶に存じます。本校も大正六年上田女子実業補習学校として発足以来幾多の変遷を経て、終戦後の上田商工学校と併合し、学制改革によって上田市立高校となり昭和二十四年県に移管され現在の上田千曲高等学校に改称され発展を続けて参りました。創立以来六十年の伝統を誇り、多くの人材を輩出して地域の要望に応えて現在に至っておりますが、その間一万数千人に及ぶ卒業生は地元はもちろん全国各地に散って、各方面でそれぞれ職場や家庭にあって社会に貢献しております。現在全日制定時制合わせて千百人を超える在校生が、先輩の残された高遠なる建学精神を継承し、その理想の実現を目標とし職員の指導の下に研鑽と実践に励んでおります。同窓各位の残された質実剛健にして真摯な生活態度の立派な伝統の恩恵を受けて素直に伸びつつあるこれらの生徒も、やがて巣立って同窓会の一員となるわけですが、若い先輩や人生経験を積まれた年配の方々のご指導や励ましを受けて立派な同窓生に育つことを期待しております。

さて千曲川の清流に臨み自然に恵まれ四季折々の美しい風物に育くまれる地理的環境は変りませんが、施設の老朽化が著しく校舎改築を願う動きが起こり、期成同盟会が結成され活発な運動が展開され、昭和四十七年に文部省の認可を得て全面改築が決定しました。

工事は経済界不況の波を受けながらも順調に進渉し近代建築の新校舎の完成も間近く、新しい環境も次第に整備されつつあります。これについては同窓会の各位には全面的にご協力下さり、推進力となって活動して頂くと共に醵金にも多額のご厚志を賜わりましたこと感謝にたえません。改めて心からお礼申し上げます。

さて同窓の皆さんが深い郷愁を持ち多くの想い出を残された木造校舎も来年度には解体を終え新しいグラウンドに造成される予定になっています。陽春の訪れと共に咲き誇った校舎間の桜も一部分を残してその姿を消すことになります。騒音と公害に悩まされながら都会で働いておられる各位にはご帰省の機会を持っていただいて、新旧の母校の姿と比較されながら懐旧の情を慰めると共に新しい出発の前途を祝って頂き、また後輩を激励してお導き願うため、母校へのご訪問を お待ち申 し上げます。

この夏本校定時制野球部が全国定通軟式野球大会（神宮大会）に甲信地区代表として出場する光栄を得た際に、在京の同窓各位の心からなるご声援を賜わりましたこと、参加した選手はもちろん応援職員、生徒が深い感動と同窓の連がりの強いことへの感激を胸に刻み込んで帰校致しました。同窓会とは何ぞやという価値判断には世代の異差を感じさせるという話を聞きますが、本校の同窓会は世代の相違を乗り越えて共通の意識を通じ合える親近感をもって交流できる基盤があることは嬉しい限りです。特に関東支部は支部としては大きな組織力をもち、本校の改築の推進のためご協力下さっておることで私共も一層意を強くして新しい学校作りに頑張っております。どうか今後とも母校の発展を暖く見守っていただくようお願い申し上げます。

ここに関東支部の会報発行をお祝いし、合わせて学校の近況を報告申しあげました。各位のご厚情を感謝申しあげると共に、同窓会のご発展を祈念申しあげご挨拶といたします。

× × × × × × × × ×

祝　創刊

株式会社　三新建設

代表取締役　神林 徳治（建20年卒）
工事部長　丸山 昇一（建34年卒）

〒112 東京都文京区小石川5丁目2番1号　TEL (811)－7654・8956

祝ちくま創刊に寄す

上田高校同窓会関東支部副支部長　矢島　五郎

今回、貴同窓会の神林会長さんより貴会の同窓会機関紙創刊にあたり、何か一筆をとの御指名を受け、誠に光栄と存じつつ、あえて拙文を寄せさせていただきました。

私たちの故郷を共にする上田市には、数校に及ぶ高校があります。

貴校の創立は、その歴史が新らしきにもかかわらず、東京における同窓会の活躍はすばらしきものがあると存じています。先年貴同窓大会に御招待を賜り、満堂に熱気あふれた男女同窓生諸氏の団結にみちた瞳の輝きに、強く大きな感動も覚えた次第です。

長年に渉り、私も母校上田高校同窓会、関東支部の運営につくして参りましたが、同窓会の運営というものは、中々にむつかしく年一回の大会開催の前後は、ムヤミヤタラと役員幹事は忙しく、無事盛会に終了してアタリマエ、何かミスがあると役員幹事は全責任を痛感する……というムズカシイ運営でもあります。

そしてまたこの同窓会なるものは、一般の事業運営のそれと異り日常いつも思考し、よりよき結集と連絡等のことのみ考えていることも出来ないという一種の友交団体でもあります。従って役員幹事の熱意が会の盛衰を左右すると断言するも過言でないと存じます。

そして更には、一般同窓生会員諸氏が役員諸氏の心苦を推察し、心からなる理解と協力をおしまぬところに、同窓のよしみが深かまりゆくものでもありましょう。

同窓生の先輩後輩の交流は尊く年一回の大会のみの会合では、中々にその親睦友好の実も上げにくい、そうした貴会役員の方々の配慮からも、今回の同窓会報の発行によって、同期生は勿論、先輩後輩のより強き交流団結を切望されての御計画であろうと存じます。

くりかえしますが、それには絶大なる同窓生全員の方々が、温い心でこの編集に協力、助言がもっとも大切なことでありましょう。

千曲の清流は激流あり、淀みの水域もあります。会報発行の今後に、それに似た苦難の流れなしとはいえません。しかし千曲の流れは清々とし私たちの故郷に美しく生きています。上田千曲高校そこに学んだ貴同窓生皆さん方には千曲川の脈々と永遠に生づく強いスピリットが体内に流れている筈、必ずや美しい会報の永続発行と貴同窓会の発展は結実されてゆくことを信じています。私の経験から申し上げましても、春秋年二回の会報「うえだ」を発行し八年の歩みを続けて参りましたことによって、予期以上の同窓会の友和団結が生じてきたことのよろこびを、私たち役員幹事は身にしみて感じています。

願わくば折角に立案して実行された貴会の会報が、内容の向上をめざしてゆくことも大切なことではありますが、要はこれを持続せしめてゆくことが最も大切なことであることを私も切願する次第です。

創刊号に対してのお祝詞の一文ともすべきところ、むしろ苦言めいた文章となり、申訳なく存じてはいますが、貴会の今後益々の御発展を祈念する倚、切なるものがあり、私の経験の寸言も加えて送稿させていただきました。

最後に繰返し貴会の御発展と同窓生皆さま方の御健勝を併せ祈り私共上田高校同窓会との御親交もお願い致しまして擱筆させていただきます。

33年間奉職して

久保　敏

（長野工業高等学校教諭）

戦争、不況、就職難、学校つくり、学窓での思い出は、それぞれさまざまだが、そこには人のつながりがあり、学校の歴史がある。

女子校である上田女子実科補習学校（町立）が大正六年に設立された。校舎は新参町の上田女子尋常高小に併設されていた。二年後の八年五月、市制施行とともに市立と改称。さらに翌九年には高等女学校令で上田実科高等女学校に。また、昭和十八年の中学校令、高等女学校規定の改正で上田市立高等女学校と改称した。

一方、上田市は市の振興と商工の発展、特に戦争華かな時代を迎えて産業人の基盤となる商工の実業学校が、上田市に当然あって然るべきであるとの機運が醸成され、昭和十七年に市立商工学校が設立された。三年後の二十年に上田工業学校に変更。しかし、敗戦で一年後にはまた上田商工学校と改称した。この男子校と市立高女が合併して市立高校に、さらに、二十四年四月、県立に移管して現在の千曲高校となった。

先に記したように、昭和十七年四月に市立商工学校が設立され、建築科、商業科、さらに修業年限一ヵ年の商業課程の専修科が設置された。校舎は材木町の旧東小（現一中）をあてる予定であったが、東小校舎の新築まで旧大原簿記学校（現一中の位置にあり、西沢章一先生が校舎、施設等すべてを市に寄贈した。）に置き、さらに小県蚕業学校（現上田東高）の蚕室を教室として借り授業をした。つまり学校は発足したが、借家住いで校舎は無かった訳である。ちなみにこの年の生徒数を調べてみると建築科四十三名、商業科四十九名、専修科七十五名、合計一六七名、教師数は九名であった。上田市長浅井敬吾氏が校長事務取扱となり、同年九月初代校長として湯川始先生が着任する。

翌十八年四月、国の要望にこたえ機械科が新設された。ちょうどこの年学校を終えた私は適当な職もなく、母一人弟一人の生家に帰えっていた矢先、湯川先生の訪問を受け、教師としての第一歩を踏出したのもこの年のことである。戦闘帽に国民服というでたちで新任のあいさつを白亜館の庭でしたことを思い出す。

昭和十七年の国民生活は、食塩の配給通帳制実施。衣料切符制実施。金属強制回収（町や村のつり鐘は元より家庭のなべ、かまの類まで戦争に勝つため供出したこと）。十九年には、建物の強制疎開。学童疎開。砂糖の配給停止。煙草の配給制度実施（一日に六本）。

一方戦争は、十七年にミッドウェー海戦。米軍、ガダルカナル上陸。十八年にアッツ島日本守備隊全滅。十九年にサイパン島失陥。東条内閣辞職。学徒勤労動員令、B二十九本土空襲開始。

当時の社会状勢は全く混とんとすさんだ時代であり、国の行方もわからない時代であった。第二次世界大戦のもたらした影響は生徒たちの進路を変える悩みさえ引き起こしている。学業より軍事教練それも週に三日。工場動員。食糧増産のため原野の開墾。学窓より予科練に行く者。授業は週に一日?。

戦後もう三十年になるが戦中に学んだ人たちのいまわしい記録は、つい先頃のように思い出される。学窓での思い出はさまざまだが、そこに人のつながりがあり、学校の歴史がある。

「旅情」にうたわれた千曲川の清流、洋々と果しなくながれている河畔に。長年の懸案である校舎改築の大事業が着々進行し、現代にふさわしい学園が誕生しつつあることは、まことに喜びに堪えません。「何億の金力」ではなく、一万余の千曲の卒業生が半世期にわたってつくってくれた結晶と思います。ぜいたくと安易の中からは、逞しいものは育たないと聞いています。どうかこの恵まれた施設、環境になれ、甘えることなく頑張ってもらいたいと念じています。

その行動力を讃えて

建築部会・部会長　竹重　辰躬

我が建築部会は現在の支部長である神林さんによって創始されたといって間違いではないだろう。彼の行動力には常に敬服している。そして人使いのうまさである。良きブレーンを常に自分の回りに置いて行動する巧みさは一寸誰にでも真似の出来ることではない。その彼が同窓会の機関紙の発行を思いついたのである。無論、彼にいろいろとそそのかした奴もいない訳ではなさそうだが、とに角、やると彼がきめたのである。こうなったらもう仕方がない。我々もやるしかないのである。広告を取って来い、記事を集めて来いでしょっちゅうの会合である。この辺の兵隊の動かし方は絶妙である。彼は編集、彼は広告、彼女にはマネージャー役をと誠に適材を適所に配置して行く、こうした事には天分というものがあるらしい。

この辺で建築部会成立の経緯もついでに話しておこう。

もう十数年も前の事、私も都職員として文京区役所の建築指導課に奉職していた頃の事である。正月やお盆頃に文京区を中心として建築に関係ある諸君と一夕を一ぱいやりながら過したものである。

そんなときにたまたま久保先生（現長工）が就職運動で上京されて一緒にこの席にお招きした事がきっかけとなり、もう少し範囲を広げてこの広い東京にいる仲間達にも声をかけてやって欲しいという要望やら願いが先生から彼を中心とする仲間達に伝へられたのである。たしか昭和三十七、八年頃の事である。

建築科の第一期の卒業という事もあって格別の指導力を発揮する彼の事である。早速この難事業に取り掛ったわけで、先ずどうやって会を運営するか、会則をどうするか、名簿等はどうするか、そんな時でも決して彼は自分の意見を前面に押し出したりはしない、しかし決定の断は必ず彼が下す、この辺にきっと彼の指導力の根源があるのかも知れない。昭和三十九年の秋には、とうとう建築部会設立にまでこぎつけたのである。この時には母校からも校長先生始め久保先生や丸山先生他をお招きして実に盛会であった。

続いて昭和四十二年には名簿を整備して刊行する、この時も名簿を無償配布しようと彼の八面六ピの活躍で逆に黒字が出るという偉業を成し遂げたのである。

爾来、幾多の問題があったがとに角、その都度解決して今日に至ったのである。

私も昨年よりこの傑物、神林部会長の跡をになって建築部会の部会長に就任してなんとか本年建築部会を開催する事が出来た事を非常に光栄に思っている。

ここに〝ちくま〟の発刊に当り彼の功績を称えると共に新生のこの新しい会報が、同窓会全体の皆さんのために良い潤滑剤となってますます千曲高校の同窓会関東支部の発展を願ってやまないものである。

年令差の大きい女性達と

家政部会・部会長　荒井　和子

私達家政部会は他の皆様の部会に刺激されて関東支部が発足すると同時にスタート致しました。この時には部会の役員の皆さんはもとより、他の部会の皆さんにも大変にお骨折り戴きました。

私事ですが私達が上田高等実科女学校を卒業しましたのは昭和十一年の春でございまして、女学生時代は大変な不景気のどん底でございましたから、修学旅行すらどうしようかという時代でございました。無論、部会の皆さんは私達より二十年近くも前に卒業された方もいらっしゃいますし、戦中、戦後また極く最近の卒業生まで非常に幅広い年齢層にまたがって現代社会の中でそれぞれ活躍されていらっしゃいます。従って物の見方や考え方が違っていることもたしかにあると存じます。そうした皆さん方といろいろな考えを一緒にして、一番良いという事を見つけ出したいと念願しております。その舵取りの役目を私達が果し得たらと存じております。

今回の座談会には私も出席させて戴いてお古いお話等も申し上げようかと存じておりましたが都合で出席出来ませんでしたが幸い他に、女性の方々の出席を戴いてある一方の代弁をして下さった事は本当に良かったと存じます。

会報〝ちくま〟は支部長・神林さんはじめ多くの皆さんの御努力があって誕生したものでございますのでどうかこの広場を通して、こうした雑多な考えを一つにまとめる助けになりましたらと念願致しております。

会報を助人として

機械部会・部会長　山崎　定尾

本年五月二十八日、機械部会の初の総会が開かれました。ようやく機械部会も関東支部の一部会として歩みはじめたわけです。

この年に、期せずして関東支部の会報〝ちくま〟が誕生したことは私としても一段と大きな喜びであります。

会報発刊のために努力された神林支部長をはじめ、関東支部の役員、編集委員の皆さまに心から御礼申し上げます。

また、会報の紙名〝ちくま〟は本校同窓会関東支部の活動機関紙にふさわしい、実に良い名前だと感銘しております。というのは、〝千曲高校〟の〝ちくま〟であると同時に、一日として忘れえぬ故郷の川、〝千曲川〟の、あの美しく、清く、そして激しい川への想いを新らたにさせてくれます。しかし、その名が示すように〝千〟の〝曲がる〟川でもあります。これは、人生、事業、学校、そして同窓会の歴史に似ています。千曲川の水は、どんなに長い、曲がった川であっても、やがて、日本海という目的地に達します。〝ちくま〟の前途も多難でしょうが、流れにしたがって川幅を広げ、やがて大海に達するように立派な会報となることと思います。

さて、機械部会も発足しましたが多くの悩みをかかえています。

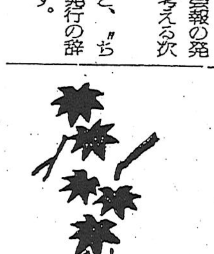
先ず、機械科出身者の現在の職業の多様化です。とくに二十年代の卒業生で機械関係の仕事にたずさわっている人が少ないようです。したがって共通話題に欠けるきらいがあります。また、卒業生の消息がつかめていないことです。

しかし、これらの問題も、序々に解決してゆき、会員が仕事を離れて憩う集いとするよう努力しております。

会報の発刊を機会に、〝会報〟の助けをかりて、全卒業生の現住所、消息などの情報を得て機械部会の発展のためにつくしたいと考えております。

このような意味からも会報の発刊の意義は大きいものと考える次第であります。

最後に関東支部の発展と、〝ちくま〟の永続を祈願して発行の辞にかえさせていただきます。



祝　創　刊

長野県上田千曲高等学校
学校長　**塩原松美**
長野県上田千曲高等学校同窓会
会　長　**滝崎　隆**

竹重辰躬（建21年卒）
株式会社電通・勤務
（建築部会・部会長）
〒253 神奈川県茅ヶ崎市旭ヶ丘5の31
TEL 0467-85-5360

㈲喫茶ポピー
店主　荒井和子（家11年卒）
（家庭部会・部会長）
店舗 東京都中央区日本橋堀留町2-1堀留ビルB1TEL661-9540
自宅 東京都港区南青山2-22-4秀和レヂデンス203号TEL408-3849

一般ブロック建築請負業
小林ブロック工業所
社長　小林一馬　（建24年卒）
埼玉県大宮市櫛引町1丁目177番地 TEL0486-63-0488

協和建築設計事務所
代表取締役　伊藤正次　（建29年度）
東京都杉並区久我山2-25-19富士見会館3階TEL332-0408